石巻市

文化財だより（第7号）

――埋蔵文化財緊急発掘調査特集――

もくじ

狐崎スケカリ浜遺跡の発掘調査…… 2
―漁港関連道路建設にかかる緊急調査―
沼津貝塚の発掘調査…… 6
―史跡標識設置部分発掘調査―
梨木畑貝塚の発掘調査……10
―人骨埋葬状況調査―

はじめに

石巻市教育委員会社会教育課

今回は従来まで石巻市教育委員会が実施して来た埋蔵文化財の発掘調査のうち整理の進んだ3遺跡について、ご紹介したいと思います。

スケカリ浜は昭和49年に行なわれた、狐崎、福貴浦間の漁港関連道路の建設工事に伴ない発見されたもので、調査時点ですでに大半が消滅していました。

また沼津貝塚は、史跡標柱、説明板、注意板を設置する敷地部分について実施した、記録保存のための発掘調査概要です。

梨木畑については、昭和51年住宅地内で出土した貝塚人骨の状況調査を報告したものです。

さて、近年に於ける開発の進展は、市内に約80ヵ所ある各時代の埋蔵文化財に重大な影響を及ぼしています。

多くの場合、遺跡地の所有者などが行う宅造や開田、畑造成など小規模な破壊が多いのですが、最近は公共事業による場合も多くなっています。

特に区画整理や道路建設などの場合は個人事業によるものより規模が大きく、単一遺跡全体あるいは複数の遺跡が消滅してしまう危険があります。

市行政では、こうした貴重な埋蔵文化財の破壊を未然に防止するため、関係開発部局とたえず連絡を取りながら、できるだけ埋蔵文化財を保護するよう努力していますが、年々埋蔵文化財の現状変更が増加し、有効な保護対策が及びにくい状況になってきております。

したがって、これらの保護を進めるには、地権者をはじめ、一般市民の方々の理解と保護に対する認識の高揚が必須条件であり、今後、市としても精一杯の努力を傾けるつもりですので一般市民の方々のより一層のご協力をお願い申し上げます。

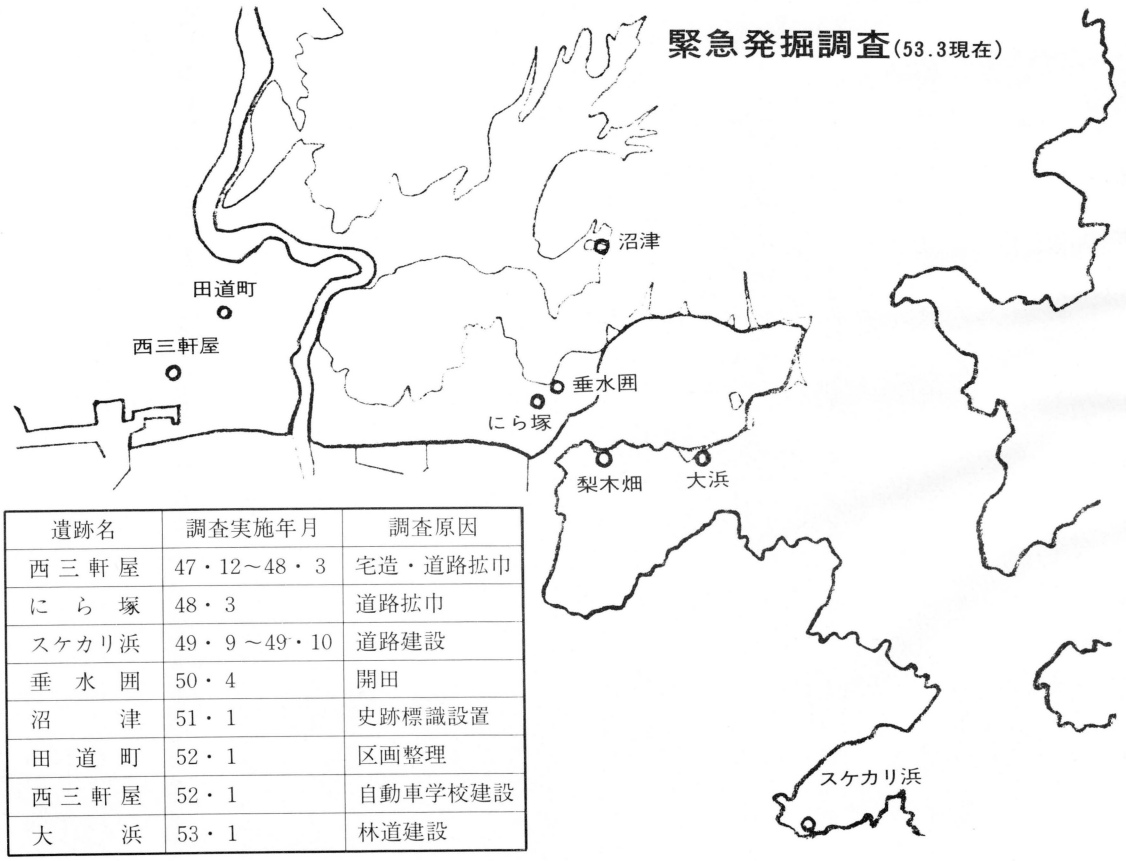
埋蔵文化財は地下や水中に埋没している過去の人間活動の証跡全体を意味しており、土器や石器などの遺物ばかりでなく、それらの置かれている状況や、住居跡、炉跡、貯蔵穴などの遺構との有機的関係が重要な意味をもっています。

従って遺跡を破壊し、その有機的関連を断ってしまう事は、土器や石器、住居跡などの遺物、遺構を、単なる骨董品に化することに等しく、金銭的価値は見い出し得ても、知識や真理の源泉としての価値は失なわれてしまうでしょう。

ですから、埋蔵文化財は、現在活用するに必要な範囲の発掘は実施すべきですが、できうる限りこれを保存し将来の活用に期するよう配慮するのが現代人の責務ではないでしょうか。

なお、本号に掲載した報告文は、調査担当者、石巻市文化財保護委員木村敏郎の指導のもとに、石巻市教育委員会社会教育課が作成したものです。

また写真、挿入図の作成も社会教育課が担当したものです。

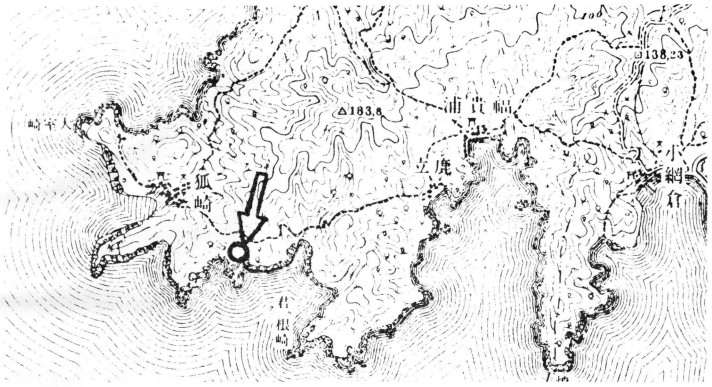


遺跡名	調査実施年月	調査原因
西三軒屋	47・12～48・3	宅造・道路拡巾
にら塚	48・3	道路拡巾
スケカリ浜	49・9～49・10	道路建設
垂水囲	50・4	開田
沼津	51・1	史跡標識設置
田道町	52・1	区画整理
西三軒屋	52・1	自動車学校建設
大浜	53・1	林道建設

狐崎スケカリ浜遺跡の発掘調査

―漁港関連道路建設にかかる緊急調査―

遺跡所在地　石巻市大字狐崎字スケカリ
調査期間　昭和49年９月25日～10月７日
調査面積　約10㎡
調査主体者　石巻市教育委員会
調査担当者　文化財保護委員　木村敏郎
調査参加者　文化財保護委員　佐藤雄一
　石巻市教委　今泉長厚
　〃　中村光一



1、遺跡の立地

スケカリ浜遺跡は、国鉄仙石線石巻駅の東南約７kmの牡鹿半島西岸、仙台湾に面した海岸段丘上にあり、標高約20ｍを数える。

本遺跡の周辺は、牡鹿半島部で最も遺跡分布密度が高く、主要なものとして、本遺跡の南方約2.7kmに仁斗田貝塚、南東約2.3kmに給分浜貝塚、東方約1.6kmに藤畑遺跡などが知られている。

2、調査の概要

A地点　本地点は発見時、狐崎から福貴浦に至る漁港関連道路工事により、すでに大半が破壊されており、破砕貝や土器等の遺物が、路上に散見される状況であった。

主体部は大略削平されていると思われたが、一部道路下に残存している事を想定し約10㎡の発掘区を設定したが、調査開始後、ただちに地山面に到達したので発掘調査は中止し、土層等の観察及び遺物の採集を行い調査を完了した。

削平部分の崖面に若干に残存した包含層の層序は、腐葉土を多く含む約20㎝の表土下に５～10㎝程度の黒褐色を程し、土器片等の遺物を含む包含層があり、その下位は黄褐色粘土より成る地山面に移行していた。

包含層は、すぐ東部を流れる沢にむかってテラス状に張り出した緩傾斜地に形成されテラスは約30㎡の広さを有する。

堆積層はその沢に向って若干傾斜し厚くなってゆく状況が観察された。

また一部に小貝塚を伴っていたが、すでに削平されているため、年代及びその広がりは明確にできなかった。

貝層は破砕した貝殻を多数含む混土貝層の状態を示し、確認できた貝種には、イシダタミ、レイシ、ツメタガイ、ヘビガイ、マガキ、サザエ、オオノガイ、イボニシがあり、そのうちイシダタミ、レイシの比率が圧倒的に高い。

二枚貝はほとんど確認されず、巻貝を中心にした岩礁性貝種により構成されている。

B地点　本地点はA地点の調査時に行った周辺調査により発見されたもので、発掘は実施しなかった。

遺跡はA地点南方約50ｍのスケカリ浜入江平担地に形成されており、標高約1.6ｍを数える。

波に浸食された海浜崖面に遺物包含層が露出しており、遺跡形成時の海岸線より大部浸食されていると考えられる。

海岸部の包含層露頭における層序は、近年までカキ処理場に使用されていたため、約40センチに及ぶカキ貝の堆積層が見られ、その下位に海岸礫を含む30センチ程の堅い砂層がある。

遺物はこの砂層の下半部に包含されており、更にその下位は黄褐色土の地山面へと移行している。

3、遺物

A地点からは、約百片程の縄文式土器片が採集されたが、多くは細片であり年代決定できる資料は少ない。

大別して、胎土に繊維を含み体部に連続S字状文の施されるもの（Ⅰ図A-1～A-3）微量の繊維を含み円形竹管文の施されるもの（B-1～B-2）、粘土紐貼付による連続波形文の施されるもの（C-1～C-2）、ヘラ描きの曲線的沈線の施されるもの（D-1～D-3）、肉太な貼付による隆帯のあるもの（E）、ヘラ描き縦位沈線の見られるもの（F-1、F-2）に分類できる。

これらは、各々A群―大木２b式、B群―大木３式、C群―大木４式、D群―大木８b式、E群―大木９式、F群―大木10式に相当すると思われる。

石器には削器（Ⅱ図２、４）及び剝片（Ⅱ図３）が認められるが、伴出土器型式は不明である。

他に特徴的なものとして、７点の磨石がある。

海岸に多数露出する礫を利用したもので、長軸に平行な側面、または短軸に平行な面に著しい磨痕が見られる。

材質は頁岩（Ⅲ図２）、安山岩（Ⅱ図１Ⅲ図４）、砂岩（Ⅲ図１、３、５、６）より成る。

伴出土器型式は不明であるが、おそらく大木４式に伴うものと思われる。

4、まとめ

①A地点は範囲が狭く、かつ薄い包含層にもかかわらず、６型式の土器を出土しており、その立地と合わせ見た場合、縄文時代前期後半及び同中期後半に亘り形成された、仮泊地的性格の強い遺跡であると推定される。

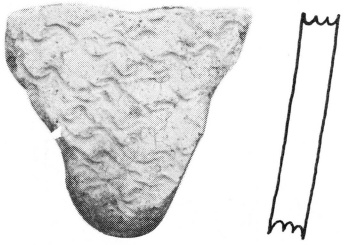
②B地点は平安時代に形成され、焼土面や焼石が広い範囲に散見されるところから、製塩遺跡の可能性も考えられる。

I 図

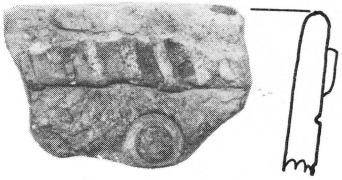
A地点（縄文）の近景

スケカリ浜遺跡（東部より見る）

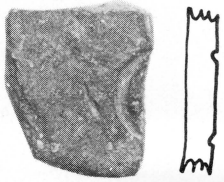
A－1（×2/5）



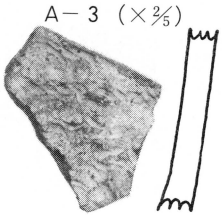
B－1（×2/3）



B－2（×2/3）



A－3（×2/5）

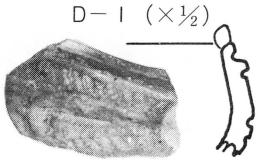


A－2（×2/5）

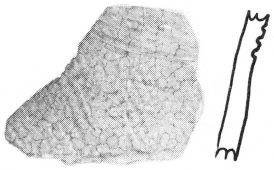
C－1（×2/3）

C－2（×2/3）

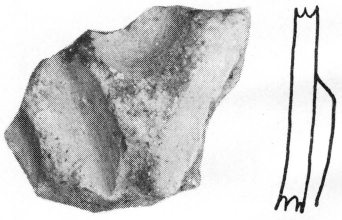
D－1（×1/2）



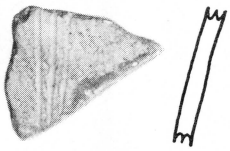
D－2（×1/2）



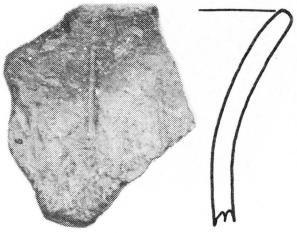
E（×4/5）



D－3（×1/2）



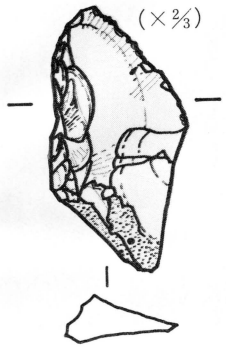
F－1（×1/2）



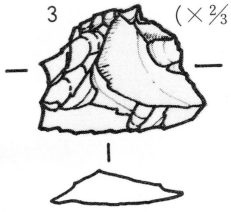
F－2（×1/2）

II　図

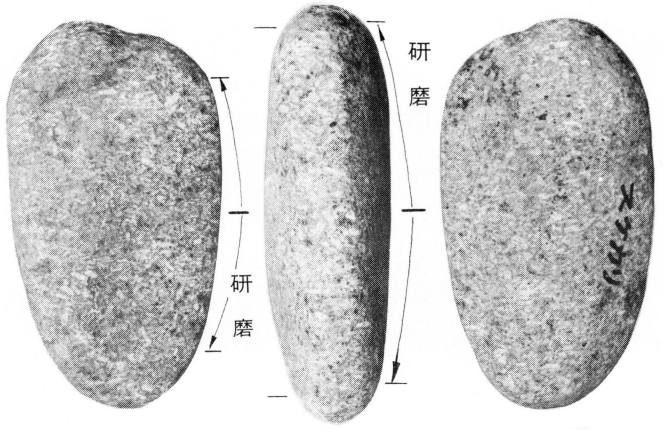
2 (×⅔)



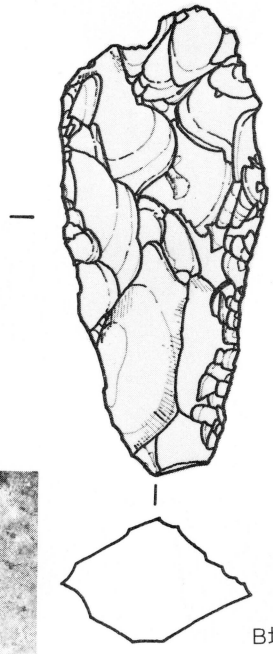
3 (×⅔)



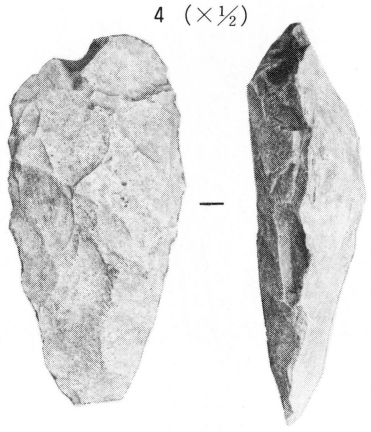
I (×⅓)



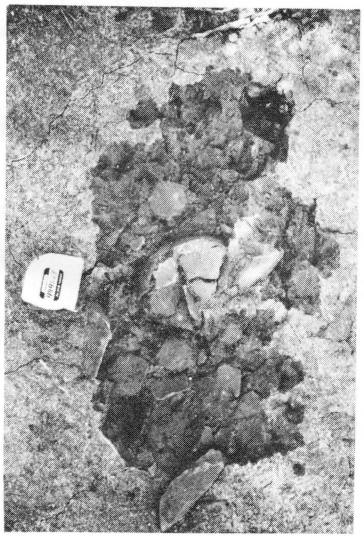
4　実測図 (×⅔)



4 (×½)

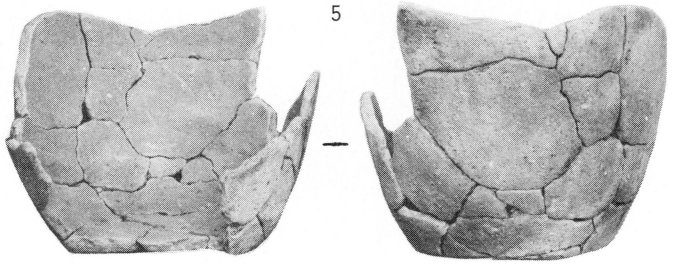


B地点土師器の出土状況

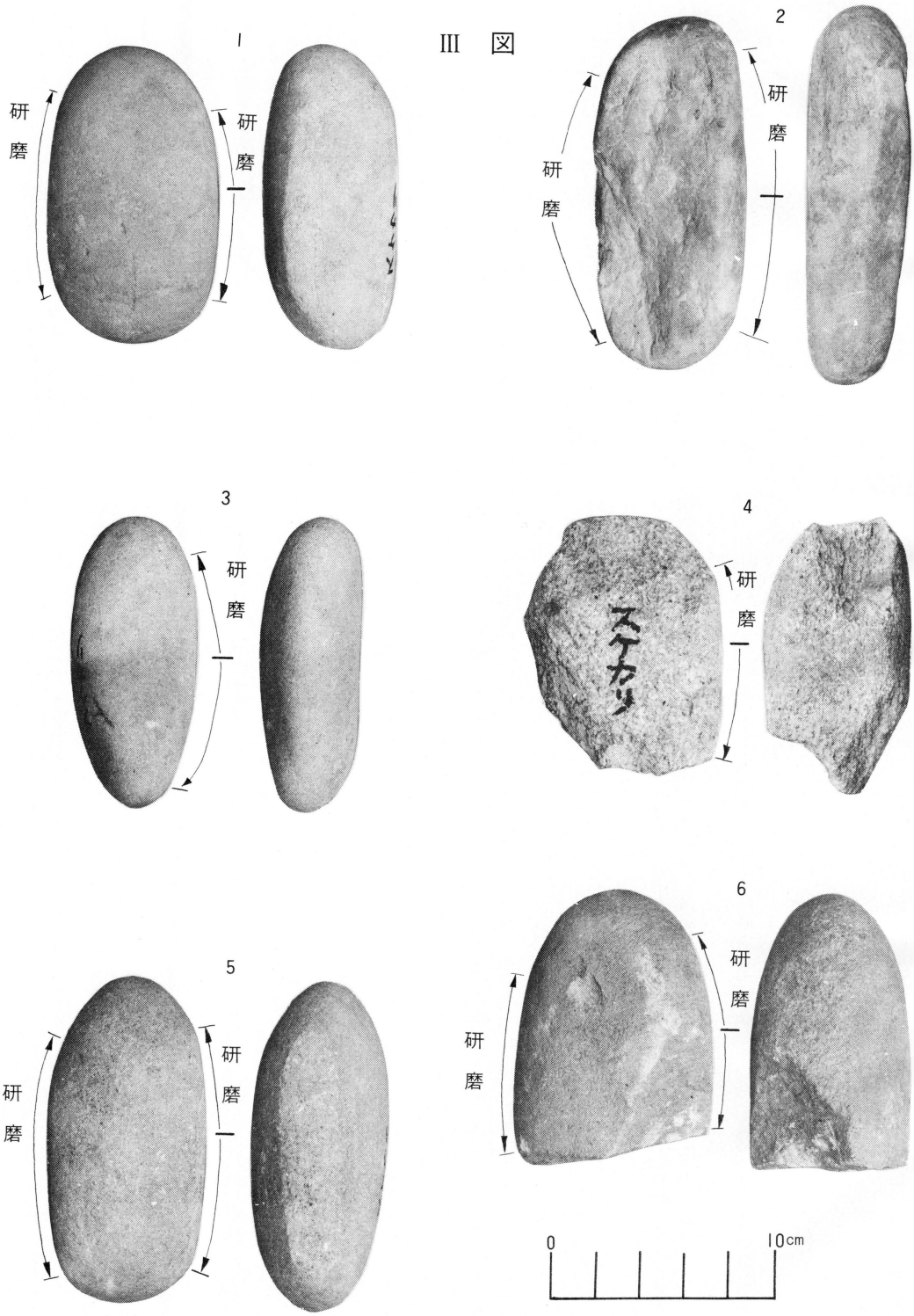


B地点出土土師器（左写真を接合）(×⅓)

5



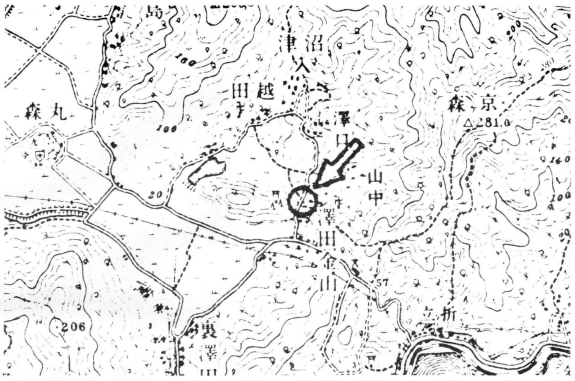
III 図



沼津貝塚の発掘調査

―史跡標識設置部分発掘調査―

遺跡所在地　石巻市沼津字出外
調査期間　昭和50年1月10日～14日
調査面積　約25㎡
調査主体者　石巻市教育委員会
調査担当者　文化財保護委員　木村敏郎
調査参加者　文化財保護委員　佐藤雄一
〃　石垣　宏
尚絅女学院短大　佐藤正人
東北学院大聴講生阿部正光
東北学院大史学科三塚敏明
石巻市教委　岩佐　貞
石巻市教委　中村光一
石巻高等学校学生　3名
調査協力者　地権者　浅野繁雄



1、調査地点

当該地点は、沼津貝塚の貝層分布内側に広がる、標高約20ｍのほぼ平担な丘陵頂面で、昭和42年市道拡巾に伴ない、宮城県教育委員会が発掘調査を実施した地点の南西、約35ｍの地点である。

標識等設置用地として選定した本地点は、市道と農道（八幡神社参道）の交差する角部の南側畑地の北東隅で、遺物の散布は非常に稀薄であった。

2、調査の概要

調査は、標識設置用地に、南北方向の1.5ｍ巾トレンチを3本設置し、遺構の確認にあたった。

厳寒のため表土は凍結し、表土剥離は困難を極めた。

その結果、東部に設けた二本のトレンチは、約30㎝で地山の黄褐色土に達し、見るべき遺物、遺構は検出できなかったが、西端のトレンチに於いて、大洞A式土器を包含する薄い包含層が確認され、複数土器の置設より成る遺構が検出された。

このため、発掘区を西部に1ｍ×2.5ｍ東部に1ｍ×4ｍ程拡張し、調査を進めたのである。

その結果、地表面下約30㎝のレベルに四個体の土器より成る一群の遺構が検出された。

土器は、A（甕）B（深鉢）C（深鉢）D（浅鉢）より構成され、他に何らの遺構も伴っていなかった。

Aは6コの山形突器を有する大口径の甕で、倒立した状態で置かれていた。頸部から口縁部が依存し、口縁円周の約7割が残存している他は、耕作等により削り取られている。

Bは大型の深鉢形土器を正立して置設したもので、やはり耕作により胴部以上が欠損している。底部中央に固意に破損させたと思われる欠落部分がある。

C（II図7）は一個体の土器がC-1、C-2C-3の3ヵ所に分置されており、明らかに意図的に分散させたものである。

接合段階で各々が接合し、これらは同一個体である事が判明した。

D（II図6）は倒立状態でC-2の器体に接して置かれていたもので、耕作により底部は欠失しているが、本来底部が存在したか否かは不明である。

また、C-3とDの間に、長径約9㎝の頁岩製の玉石が置設されていた。

全面に磨痕が見られ、だ円球体状に整形されているが、いかなる意味をもつのかは不明である。

なお、B土器の東部、約1ｍの付近に焼石及び大型の土器破片が検出され、周辺に比較的多くの木炭粒を伴っていたが前記遺構群より10㎝程高いレベルに包含されており、両者の間に直接の関連があるか否かは明らかにできなかった。

土器の置設遺構は、南北約2ｍ、東西約1.5ｍの範囲であるが、更に西部に広がる事も予想され、限定された範囲の調査では、その性格を確定するまでに至らなかった。

3、遺物

表土中から縄文後期及び縄文晩期の遺物が若干出土した。

大洞A（II図1、5）大洞C_2（II図2）大洞C_1（II図4）大洞BC（II図3）などが認められる。

また確認された包含層中からは、前記四個体の土器を含む、大洞A式期の土器片が出土した。

うち掲載したのはC個体（II図7）及びD個体（II図6）の復元した2個体である。

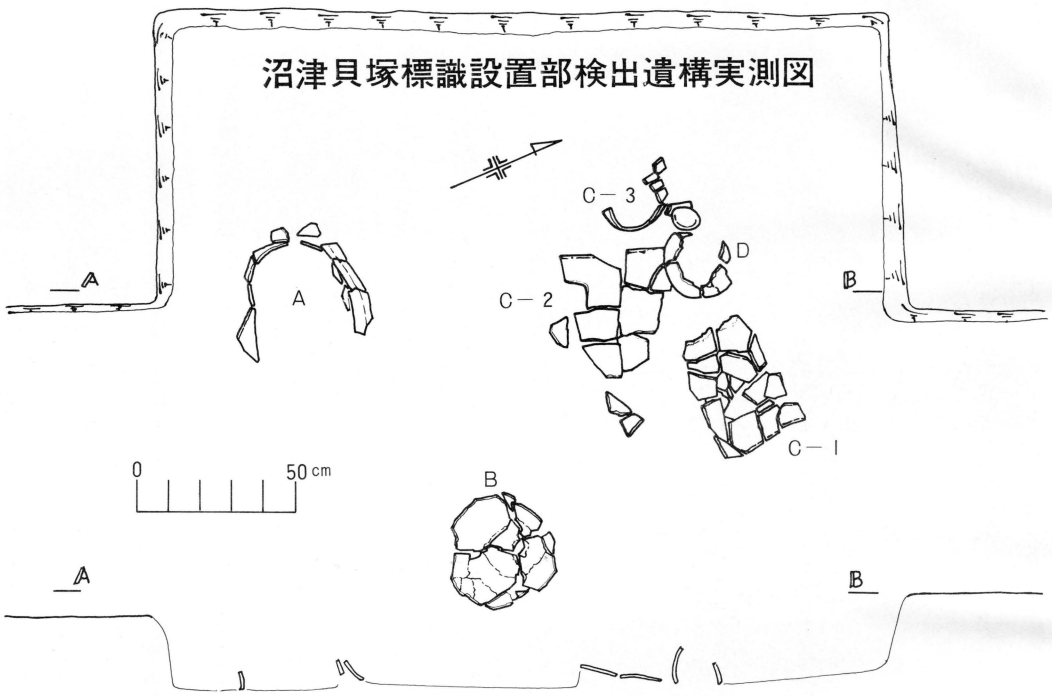
他のA個体及びB個体はまだ接合が完了していない。

C-3とD間に発見された、だ円球体状の石製品は、形態的にすり石に類似するがその用途は不明である。

4、まとめ

①標識設置部分の敷地東半部は全く遺構が存在しなかったが、西半部は大洞A式土器の薄い包含層が存在する。

②西半部に於いて、大洞A式期の4個体の土器から成る一群の遺構が検出されたが、更に西部に広がる可能性があり、その性格を確定することはできなかった。



沼津貝塚標識設置部検出遺構実測図

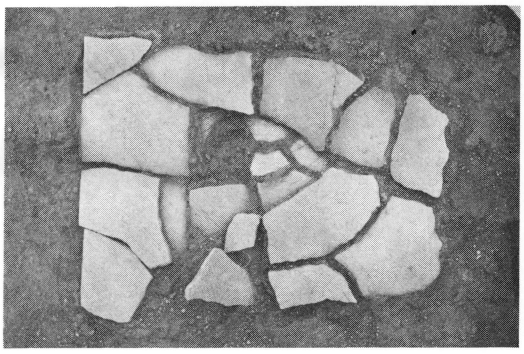
沼津貝塚発掘調査地点測量図

Ⅰ　図

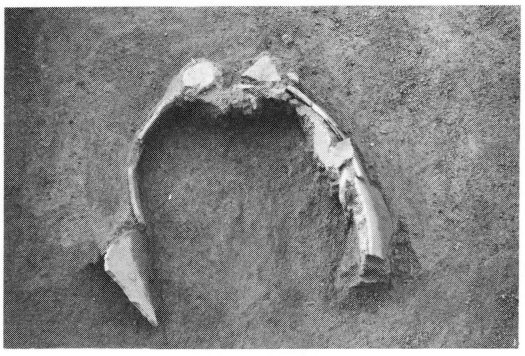
発掘の状況

土器群検出状況

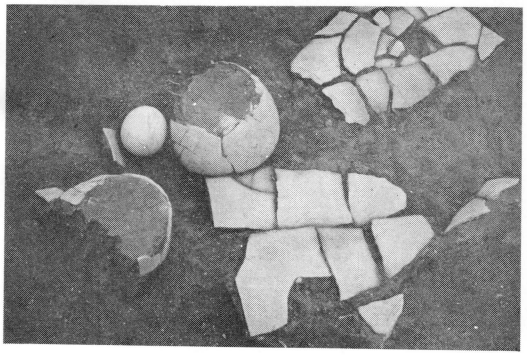
土器（C－Ⅰ）出土状況



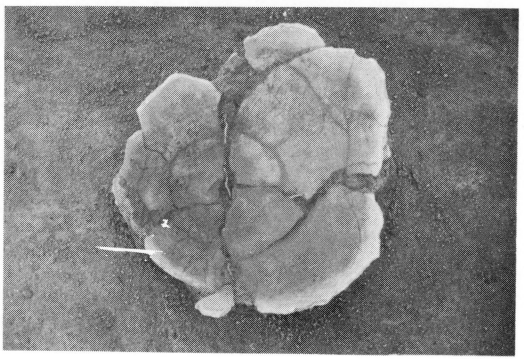
土器（A）の出土状況



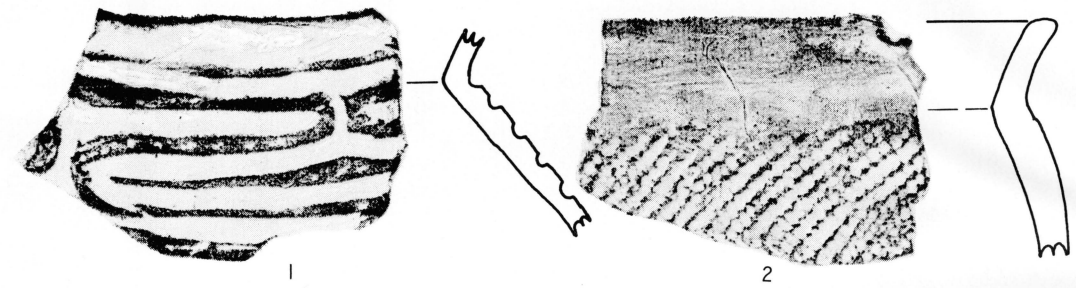
土器（D）の出土状況

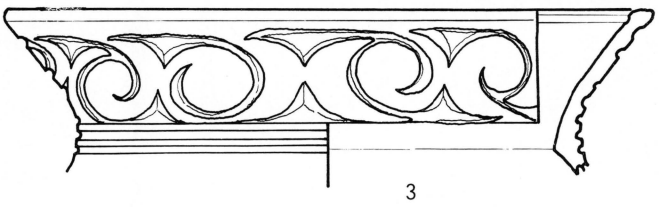


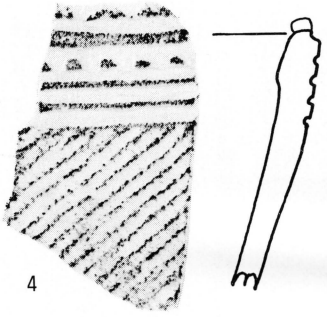
土器（B）の出土状況

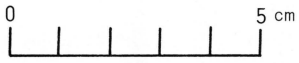


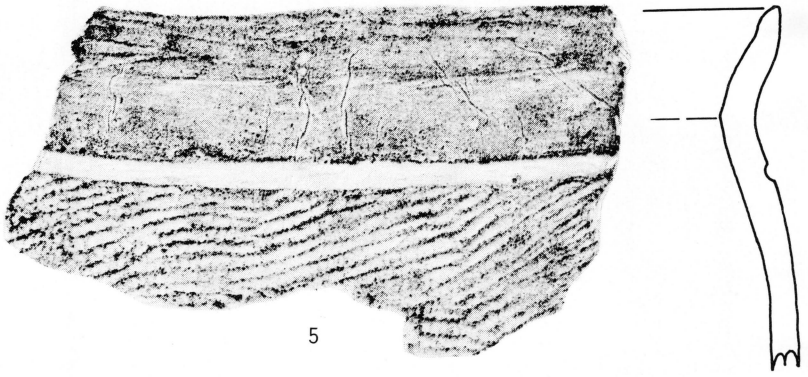
II 図



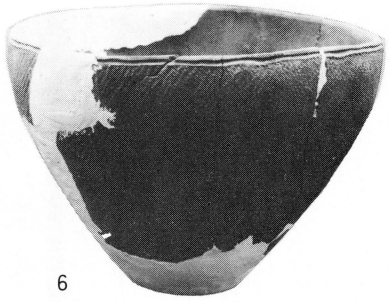


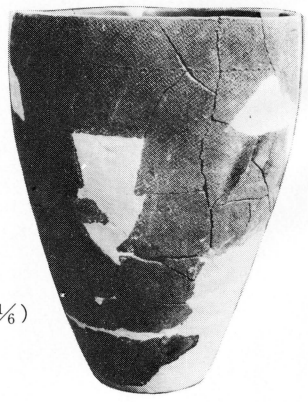






(×1/3)





(×1/6)

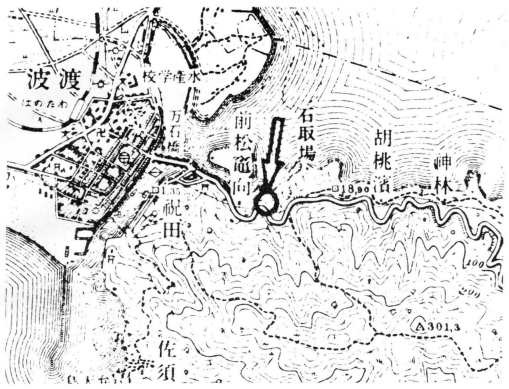
梨木畑貝塚の発掘調査

―人骨埋葬状況調査―

遺跡所在地　石巻市渡波字梨木畑
調査期間　昭和51年６月７日～11日
調査面積　約３㎡
調査主体者　石巻市教育委員会
調査担当者　文化財保護委員　木村敏郎
調査参加者　石巻市教委　岩佐　貞
〃　中村光一
調査協力者　地権者　熊谷正男
占有者　仁和田十四男

1、遺跡の立地

梨木畑貝塚は、国鉄石巻線渡波駅の南東0.7kmの丘陵斜面にある縄文時代早期から平安時代にかけて形成された大規模な遺跡である。



万石浦湾口、南岸に張り出した丘陵ふところに広がる緩傾斜地一帯、約三千㎡の面積を有するが、現在は宅地化が進み保存状況は良くない。

万石浦南岸には数多くの遺跡が認められ、東方約1kmに屋敷浜貝塚があるほか梨木畑に至る間に、大浜、神林、胡桃浜一本杉などの遺跡が分布し、北方約1.8kmには沼津貝塚が存在する。

なお、昭和38年に東北大学考古学研究室の手で本遺跡の発掘調査が実施され、縄文早期～平安時代に至る多数の遺物が発見されている。

2、調査の概要

今回、人骨が発見された地点は、昭和38年に東北大学が調査した地点の北方、海岸寄り、約20mのところで、宅地内の庭に当たる部分である。

現場は宅地建設により、約1.5mの包含層がすでに削平されており、人骨は若干に残った貝層の最下部に包含されていた。

調査は、人骨周辺に約1.7m四方の発掘区を設け実施した。

その結果、現地表下約25cmの面で埋葬人骨を検出した。

人骨は、肩部から腰部にかけ、３個の粘板岩大石を乗せ、強い屈曲姿勢を取るものであった。

各々出土した骨の部位から考え、上半身をうつぶせに、右手を腰前に、左手は尻部に置き、両足のつま先は、尻部に置いた左手先と合わさる程強く折り曲げられている。

頭蓋は発見時すでに取り上げられてはいるが、上体の方向から、埋葬頭位は北北東である事が判明した。

また人骨と同レベルで、左肩部及びその上方30cmの付近、並びに右大腿東部20cm付近の貝層面に黄色粘土を貼り付けた箇所が検出されたが、埋葬施設に相当するものか否かは不明である。

その他膝頭の東部、約20cmの付近から破砕した鉄片がまとまって出土した。

人骨を取り巻く形で検出された一群の石組みは、いずれも火熱のあとが著しく部分的に、多数の製塩土器片が密集して伴っていた。

特に人骨の右腕骨付近では、製塩土器片が一面に敷かれたような状態で並んでいる様子が観察された。

しかしこれらの石組みは、発掘範囲より更に広がるものと予想されるところから、人骨に直接関連するものでなく、人骨埋葬以前の時期に構築された製塩遺構の一部と推定される。

なお、人骨の左腰部に接して、回転糸切り手法を用い、周円から底部をヘラ削りした須恵器杯の破片が検出された。

これは、前記鉄製品とともに、人骨周辺の埋葬面に検出されたが、副葬品に相当するものか否かは不明である。

3、遺物

遺物は、人骨上部を被う、カキ、ハマグリ、アサリを主体とする貝層及び人骨周辺から、多数の土師、須恵及び製塩土器片を検出した。

土師器は杯及び甕の２種が見られ、いずれも内黒で、底部切り離しは回転糸切りによるものである。（Ⅰ図１、２）

底部の再調整なしのものが多いが、周辺部及び底部外周に手持ちヘラ削りを施したものが一点見受けられる。（Ⅰ図３）

また須恵器は、杯、甕、長頸瓶、蓋が見受けられ、いずれも９C以降のものである。

製塩土器は破片のみで、全形を復元できるものはない。

器形は、いわゆるオケ形になるものと思われ、器厚は体部で10～14mm、底部付近で13～17ミリになるものが多く、輪積み痕を残している。

また、土製支脚の破片があるが、円筒状で一端がカサ状に開いている。

残存部分で直径62mmを数える。同様の支脚が一本杉貝塚でも発見されている。

これらは、その特徴より、いずれも９Cの年代が考えられる。

人骨膝頭付近から出土した鉄製品は、約0.4mm厚の鉄板を二つ折りにして鍛えたもので刀子と思われるが、明言できない。

4、まとめ

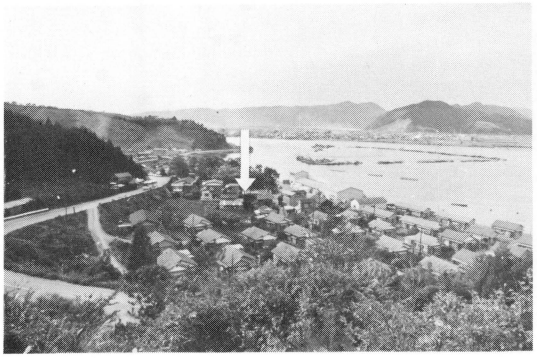
①埋葬人骨の年代は９Cと考えられる。

②体位は強く足を折り曲げた屈葬形式をとるが、土圧による変形を考慮すると、座位葬の可能性も考えられる。

③人骨の性別、年令は、鑑定を受けていないので不明である。

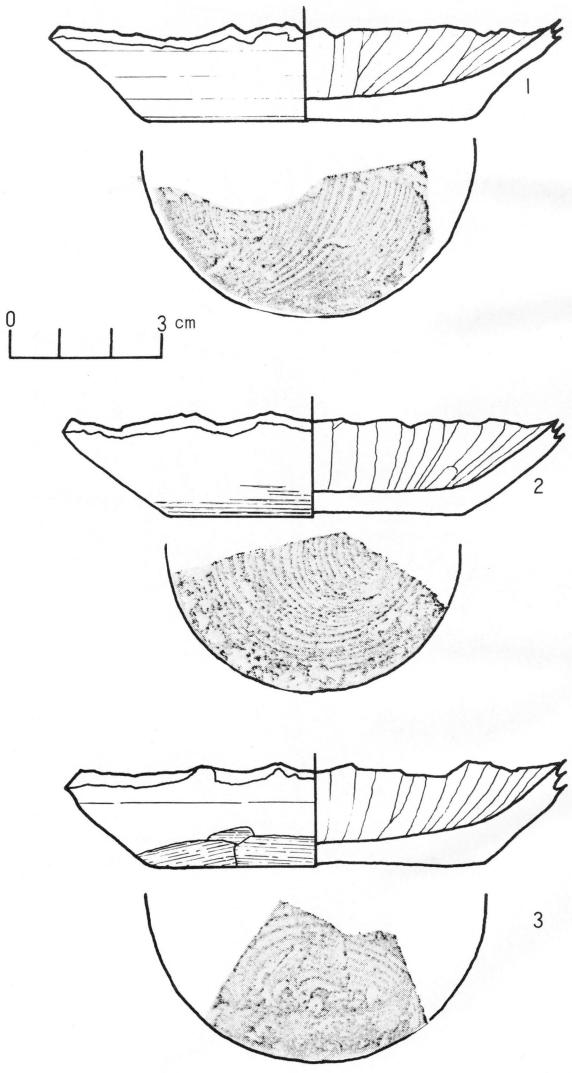
I 図

調査地点と梨木畑貝塚の遠景



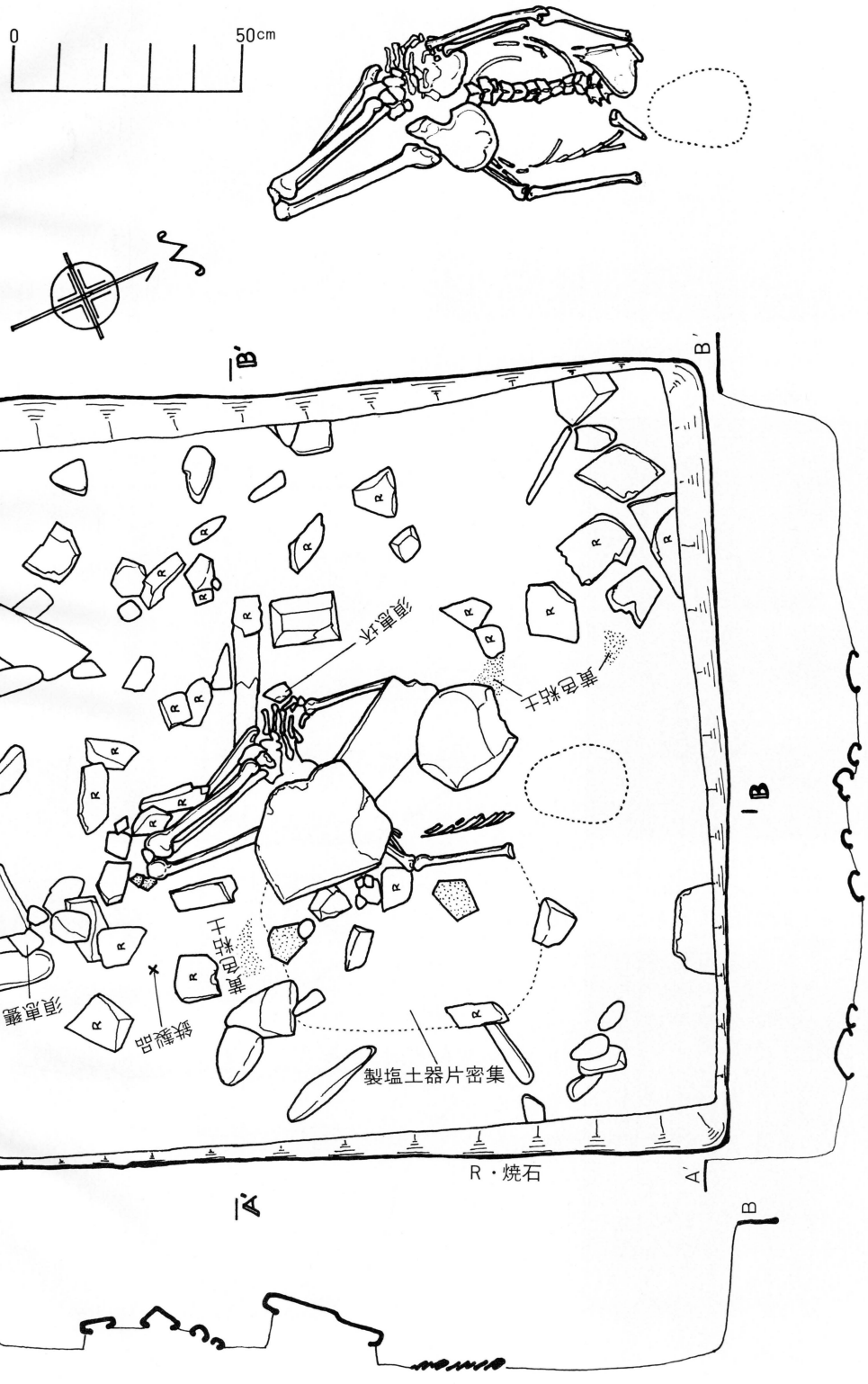
調査区域の状況

人骨の検出状況



石組みを取りはずしたところ

II　図



石巻市文化財だより

埋蔵文化財緊急発掘調査特集

昭和53年３月31日印刷
昭和53年３月31日発行

発行　石巻市教育委員会
石巻市日和ヶ丘一丁目１番１号

監修　石巻市文化財保護委員会

印刷　株式会社　七星社
石巻市南光町二丁目２２０－１